

前編

ヒール宮井のオーストラリア農業紀行

北海道で農作業が始まる前の３月、南半球では夏から秋へと季節が変わる。本誌コラムでおなじみのヒール・ミヤイこと宮井能雅氏ら一行は今年の３月初旬にオーストラリアを訪ねた。2,100㎞に及ぶ長旅を２回にわたってレポートする。

写真・文　宮井能雅













1ハーバーブリッジを背景に2,100㎞のツアーを目指す勇士たち。2農地の斡旋広告。購入希望の方は国番号61を忘れずに。3何か話し込むヒール宮井と農場主のジョン（弟）。4灌漑された土地で育つノンGM（遺伝子組み換え）のトウモロコシ。今度訪ねるときはGMコーンに!?5ケースの新型コンバイン（360馬力）の刈取部は12m幅。ちなみに収穫機のコンバインはヘッダーといい、コンバインは播種と同時に肥料を散布できるドリルのこと。6種子や肥料専用のカート。7肥料と種子はこの大型トレーラーで畑まで運んでいく。

１９７８年10月から７カ月間のオーストラリア農業実習の後、94年と99年にも同国を訪れて現地の農業情勢の変化を見てきた。今回は当時働いていた農場を訪れ、同時期に開催されたオーストラリア最大の農場ショーに足を運んだ。

アボリジニーズの言葉で赤い土を意味するビクトリア州のコルビナビンという町は、働いていた当時、小麦とえん麦、羊（羊毛、羊肉）を主体とする単純明快な農業地帯だった。今考えると実にノンビリした環境の中で海外の農業を知る機会を得たのだろう。そうは言っても、農地購入は当時から単純な一般競争入札だったり、アパートを借りるように不動産業者に探してもらったりしていた。日本の農地移動とはかけ離れた状況で、自分の農場のみならず、今後の国内農地のあり方を示唆する好事例だったのかもしれない。

作付けも上記の作物から、高収益を得られる可能性がある野菜やワイナリー栽培に移行している。収益の30％は新規作物からで、土地利用型の小麦などの作物はもっと内陸の地域でないと採算が合わないようだ。

当時、兄のピーターは弟のジョンと一緒に農場を経営していたが、00年にジョンは農地が安くて灌漑がしやすい３００㎞内陸のニューサウス


10



9


8


13


12


11



16


15


14


17

8貯留ビンはアメリカタイプと違って自然落下式の底が多いようだ。移動式のコンベヤーは北米で主流のベルトタイプがなかった。9オッと珍しい、私の農場でも使っているアマゾーネのブロードキャスタ。10以前は水田をつくっていたが、水利費が高くてやめた。現在はトウモロコシ栽培に一部利用するのみ。11375馬力のケースのトラクタ。以前はジョンディアが一番と言っていたのに……。125時間の宴会は疲れます。13兄のピーターはオーストラリアで初めてジェット・エンジンを利用してトラクタープルに参戦した。14カウラ戦争墓地に眠るオーストラリア兵士。15日本から持参した北海道の羊蹄山の水をカウラ日本人戦没者の墓にささげる岡部陽助さん（今月号の「ヒール宮井の憎まれ口通信」の語り手）。16この記念樹は今上義仁親王からの贈り物である。17同じ墓地にある、傷ついたまま放置されたイタリア兵の記念碑。

ウエールズに移住した。結局、水不足でコメ栽培は諦めたが、4000haという広大な面積で麦やコーン栽培を行なう農場になった。63歳のジョンは引退して、私がいたころには私の腰くらいの身長で、今では185cmに成長した40歳の息子トロイが経営している。

79年4月に現地を離れて長沼に帰ってから、遅ればせながらオーストラリアの歴史を勉強した。朝鮮戦争とベトナム戦争に連合国として参戦していたこと。のちにニコール・キッドマン主演の映画『オーストラリア』に登場した零式艦上戦闘機（ゼロ戦）がダーウィンを空爆したこと、シドニー湾を攻撃した日本海軍の小型潜水艇が現在も当地で保存されていること。南方戦線で戦った日本兵がオーストラリアで捕虜生活を送り、のちに考えの違いから多くの死者が発生した脱走事件があったこと。

現在においても多くの日本人や現地の関係者、日本政府関係者によって慰霊碑や墓地が丁重に維持管理されていることに心から感謝するとともに、元捕虜施設に訪れて花をささげられたことも国際交流の原点だと思う。そしてそのような日本人墓地が地球上に点在していることも、日本人であれば知る義務があると信じたい。